北陸中日新聞　2016年(平成28年)2月12日(金曜日)

かが白山

バクハツ

身近な不思議

白山の児童ら 実験

「バクハツの不思議」を楽しみながら考える集いが十一日、白山市福祉ふれあいセンターであった。参加した市内の児童ら二十二人はドライアイス、発泡性入浴剤などを使った安全な爆発実験を目を輝かせて何度も繰り返した。（松本芳孝）

発泡性入浴剤を使った爆発実験で宙を舞うプラスチックコップに喜ぶ子どもたち＝白山市福祉ふれあいセンターで

学童保育、放課後児童クラブ、公民館活動など、地域、社会教育活動を全国的に支援しているNPO法人「教育支援協会」（本部・横浜市）が協会のプログラムを体験してもらおうと、県内で初めて開いた。協会北陸も兼ねる、白山市のまちづくり・人づくりNPO法人「未来の暮らしデザイン研究所」が共催した。実験は協会本部職員の岩崎道子さんと、ボランティアスタッフの熊埜御堂さんが指導した。

ドライアイスを使った実験では、子どもたちはフィルムケースにドライアイスを入れ、ケースのふたをはめ、プラスチックコップをかぶせて、少し離れた場所で見守った。二酸化炭素（CO_2）の圧力で「ポン」という音と同時にふた、プラコップが宙を舞うと、子どもたちの「キャー」という歓声が響いた。

ドライアイス代わりに発泡性入浴剤と水を使う実験や、レモンの皮の汁を塗って風船を破裂させる実験などもした。

実験とは別に、大人を対象にしたセミナーも同センターで開かれ、協会の吉田博彦代表理事が「地域の大人で子どもたちの学びを創り出そう」をテーマに講演した。